

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

## 第8章 チョウチン両だんご釣り編

今回のテーマはチョウチン両だんご釣り用のウキ。ヘラブナの活性が高い盛期に有効なこの釣りは、ウキのトップがなじんでいく途中に「フワッ」「フワッ」と何度かサワリが出て、深なじみすると「ドン！」と入り、早い展開でアタることも多い。ヘラブナがハリ掛かりすると、サオ先が水中に引き込まれてダイナミックな引きを体感できるので人気がある。

この人気がある釣りに使うウキも様々あるが、形状、素材構成などを紹介し、それによって何が変わるのかを「尽心作」の製作者である北村滋朗氏に紹介してもらおう。

### トップが違えば使うエサも変わる

へら専科2009年11月号の特別企画「トップの違いで釣りが大きく変わる」はとても興味深い記事で、今も何度となく読み返している。

「同じ釣り方でもトップの素材が違っていると、エサはどう変わるのだろうか？」というテーマで、トップはパイプ、PCムク、グラスムクにして、ほぼ同じオモリ負荷量の3種類のウキを使い、その違いを検証した。

その結果は……。

- PCムクで時合いをつくったエサは、パイプトップではほぼゼロなじみ。
- パイプトップで時合いをつくったエサは、グラスムクトップでは沈没してしまう。

というように、トップが変われば使うエサも変わらないと釣りにくいことが証明されていた。

「ウキのトップが変わるとエサが変わる」というのは、釣り人からすれば逆の形ではあるが、これもひとつの具体例になるだろう。

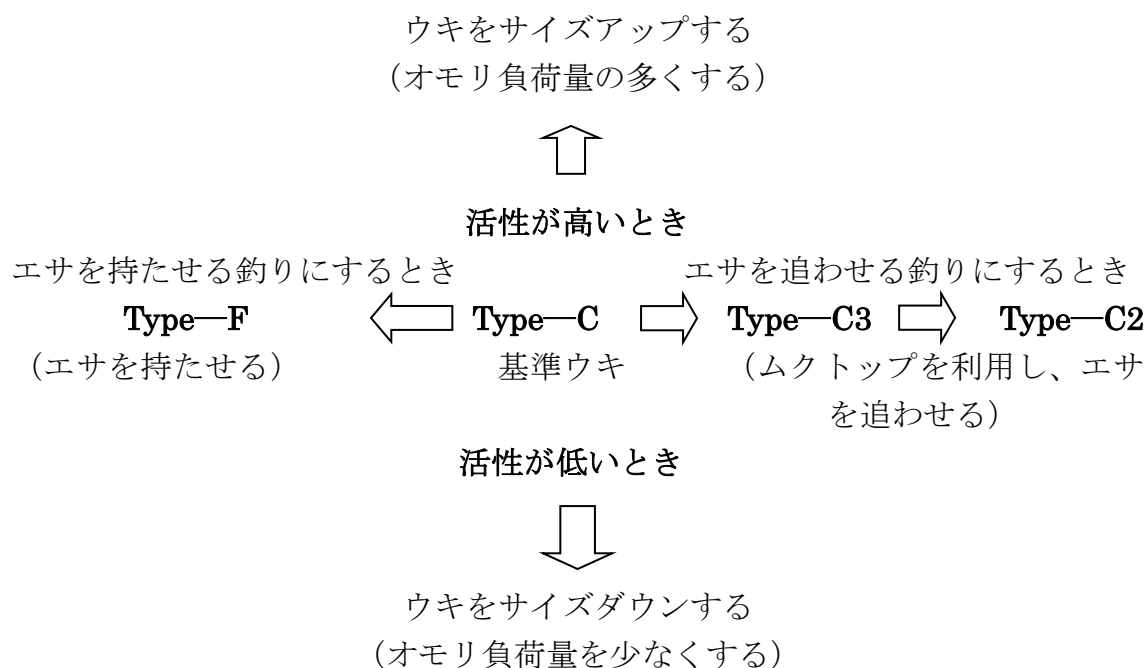
### ウキチャート

「尽心作」のチョウチン両だんご釣り用のウキは、Type-Cを基準として、Type-C2、Type-C3の3種類がある。さらに深ダナオールマイティ用のType-Fがあり、この釣りに対応するのは4本となる。

それぞれのウキが適した状況は、イラスト1のチャートをご覧ください。わかると思う。

それでは、チョウチン両だんご釣り用のウキはどのような状況のときに使い、形状・仕様の違いがどのような効果をもたらすのかを説明していこう。

### イラスト1 チョウチン両だんご釣り用のウキチャート



#### Type-C

Type-C : チョウチン両だんご釣りの基準ウキ。パイプトップ、2枚合わせ羽

根ボディー、カーボン足



**Type—C2**

チョウチン両だんご・追わせる釣り用。グラスムクトップ、2枚合わせ羽根ボディー、竹足



**Type—C3**

チョウチン両だんご・追わせる釣り用。PCムクトップ、2枚合わせ羽根ボディー、カーボン足



### Type—F

深ダナオールマイティ用。2枚合わせ羽根ボディー、パイプトップ、竹足

### 各タイプのコンセプト

#### ●Type—C

チョウチン両だんご釣り用の基準ウキで、なじませ釣り用。

ウキのトップをなじませることを繰り返し、一定範囲に集魚してタナをつくる釣りに使用する。

ボディーはくさび型（V字型）とし、重心をウキの上部にしてオモリがタナより上での沈下中のときにウキを立たせ、トップのなじみ途中でサワリが出やすい形状にしている。

トップは細パイプのテーパー付きを採用し、エサを背負わせることを可能としている。

足は、細くても強度があり、かつ比重が重いことにより、なじみ込みの良いカーボン製とし、長さは足長ウキの標準といわれる60mmとしている。

#### ●Type—C2

チョウチン両だんご釣り・追わせる釣り用（グラスムクトップ）。

エサがぶら下がってしまうと反応が悪いとき、あるいは、パイプトップではなじませることができない軟らかいエサを使うときに使用する。

トップはグラスムクにして、ボディー+足の長さよりも長くすることでなじみ途中のアタリを積極的に取っていく。

エサ落ち目盛りをハリがない状態でトップとボディの接合点に設定すればトップの付け根付近でウキが立ち上がり、ウキが立ち上がった直後からのアタリが取れるようなバランスとしている。

### ●Type—C3

チョウチン両だんご釣り・追わせる釣り用（PC ムクトップ）

Type—C と Type—C2 の中間的な位置付けのウキで、追わせる釣りのときに使用する。エサがぶらさがってしまうと（ウキのトップがなじみ切ってしまうと）反応が悪いとき、またはパイプトップではなじませることができない軟らかいエサを使うときに向いている。

トップはPC ムクにして、ボディ+足の長さよりも長くすることで、なじみ途中のアタリを積極的に取っていく。

エサ落ち目盛りをハリがない状態でトップとボディの接合点に設定すればトップの付け根付近でウキで立ち上がり、ウキが立ち上がった直後からのアタリが取れるようなバランスとしている。

PC ムクトップはその素材の柔らかさから、長過ぎるとトップがしなるように立ち上がる傾向がある。そのためタナがそれほど深くなくて、そんなに長いトップを必要としない短ザオのチョウチン両だんご釣り用としている。

### ●Type—F

深ダナオールマイティとして、底釣りと深宙釣りで使用できるようにしている。

魚影が薄い釣り場が主体の九州では、底釣りでもなじみ途中のサワリを十分に出さないとアタらないことがよくある。そのような状況下に対応するよう設計している。

ボディはくさび型とし、重心をウキの上部にして、オモリが高い位置の沈下中にウキを立たせ、なじみ途中でサワリが出やすい形状にしている。

トップはポリカーボネイト（PC）パイプの細でテーパー付きを採用し、エサを背負わせることを可能としている。

足は比重の軽い竹を採用し、長さは足長ウキの標準といわれる60mmとしている。

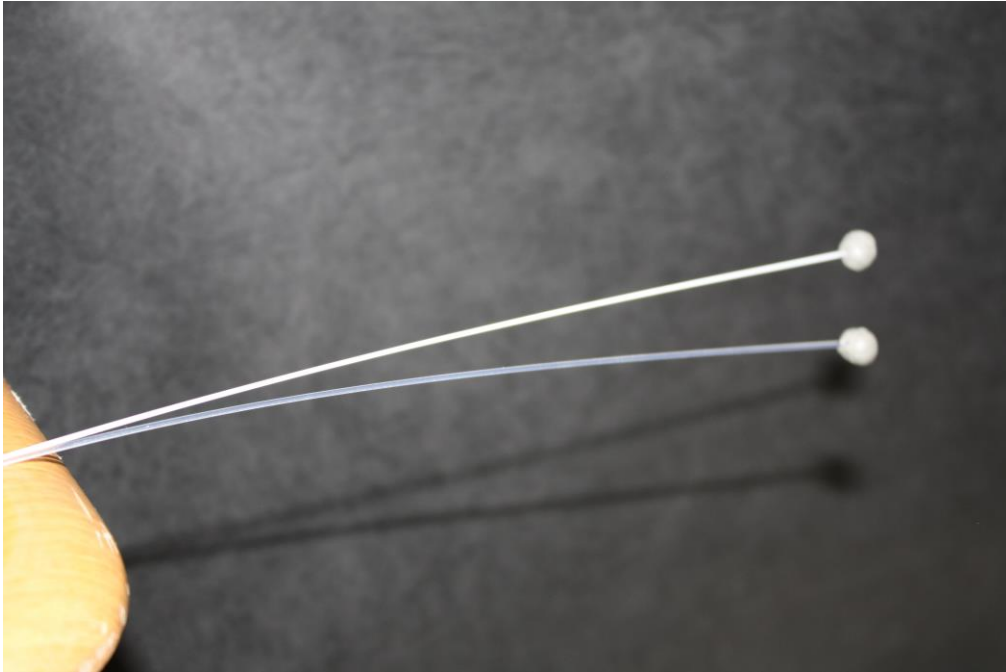
つまり、トップ、足、形状ともにサワリの出やすい形にしている。

## グラスムクとPCムクの硬度比較

写真を見てもらえばわかるが、写真上の直径1mmテーパーなしのグラスムク（100mm）と、写真下のPCムク（100mm）に1・1gの粘土オモリを取り付けてみた。PCムクのほうが、しなりがあり柔らかいことがわかる。グラスム

クはほとんどしなっていない。

また、比重はグラスムクと PC ムクではグラスムクの方が重い。



グラスムクと PC ムクの硬度比較。上がグラスムクで下が PC ムク。写真で見てもわかるように、PC ムクのほうが、しなりがあり柔らかいことがわかる。

## 各 Type の使い方

### ①Type—C

エサ落ち目盛の設定は、ハリを付けた状態で、5目盛りもしくは6目盛り出しを基準とする。これは底釣りの場合とは逆の余浮力をできるだけ残さないセッティングである。つまり、トップのなじみ途中にサワリを出し、トップ先端1目盛り残しまで深なじみしたときのしっかりしたアタリを追っていく。

もし、ウキのなじみ込みが悪いと感じれば、エサ落ち目盛りをトップ上部に変更し、トップの余浮力を減らしてウキをなじみやすくする。

### ②Type—C2

エサ落ち目盛りの設定は、ハリなしの状態で、ウキの肩とトップの接合点を基準とする。したがって、ハリを付けて沈んだところが、真のエサ落ち目盛りとなる。

なじみ込み途中のいろいろなアタリにアワせてみて、その日のヒットパターンを見つける。

大き過ぎるハリを使うとウキが沈没してしまうので、エサの比重とハリの大

長さ、重さが、この釣り方のキモとなる。

### ③Type—C3

Type—C2 と同じ。1・2mm径のトップを使用するとトップの体積が増すためエサを持たせやすく、Type—C と Type—C2 の中間的な使い方が可能となる。

### ④Type—F

Type-C と同じ。

表—1 両だんごのチョウチン釣り用ウキの仕様比較

	Type-C	Type-C2	Type-C3	Type-F
ボディ	クジャクの羽根 2 枚合わせ：5.8mm径に修正	クジャクの羽根 2 枚合わせ：5.8mm径に修正	クジャクの羽根 2 枚合わせ：5.8mm径に修正	クジャクの羽根 2 枚合わせ：5.8mm径に修正
足	カーボン 60mm	竹 60mm	カーボン 70mm	竹 60mm
トップ	テーパ付き細パイプトップ	グラスムク（根元径1.0mm→先端0.6mm）を採用している。トップの長さを利用して、沈下中のエサにしか反応しないヘラブナにアプローチする	PCムク（根元径1.0mm→先端0.6mm、もしくは1.2mm→0.6mm）。トップのストロークを利用して、沈下中のエサにしか反応しないヘラブナにアプローチする	テーパ付き細パイプトップを採用
ウキが立ち上がる位置	肩がやや出たところ	トップ付け根付近	トップ付け根付近	肩がやや出たところ
トップの長さ	短い	かなり長い	長い	やや長い
形状	いかり肩（急テーパ）で重心をウキ上部にすることで、ウキが立ち上がった後にウケ	いかり肩（急テーパ）で重心をウキ上部にすることで、ウキが立ち上がった後にウケ	いかり肩（急テーパ）で重心をウキ上部にすることで、ウキが立ち上がった後にウケ	いかり肩（急テーパ）で重心をウキ上部にすることで、ウキが立ち上がった後にウケ

	にウケが出やすい	が出やすい	が出やすい	が出やすい
--	----------	-------	-------	-------

### エサ使いの幅の広がり

ムクトップウキの使い方は、パイプトップウキのように「なじんで戻してツン」というアタリを狙うのではなく、なじみ途中のアタリを取るのが主流である。

これはハリスの長さに加えて、長めのトップにすることで、動いているエサにしか興味を示さないヘラブナに、エサを追わせながら食わせるからである。

また、パイプトップではなじみにくい軟らかいエサでも、ムクトップではその自重により、エサをなじませることができ、エサ使いの幅を拡げることができる（イラスト1参照）。

逆に言えば、エサが同じでもトップの素材が異なると、別世界の釣りになってしまう。

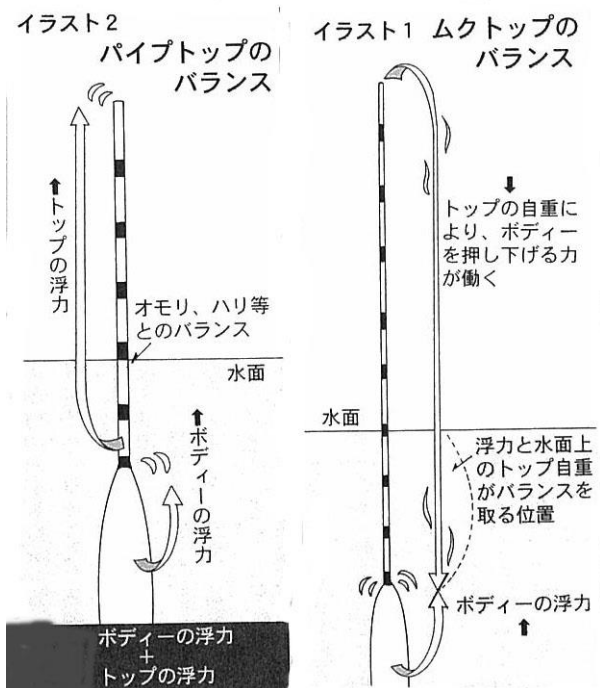
夏場にヘラブナが湧いてしまい、ウキがなじみにくいことは多くの方が経験していると思う。

このような場合、グラスソリッドのムクトップウキを使うとなじませることができる。これはまさに、トップの比重を利用したものである。

お風呂で洗面器を逆さにして、空気が入ったまま沈めようとする、沈めるのにかなりの力が必要となるが、底が抜けている洗面器であれば、簡単に沈めることができる。つまり、空気が入った洗面器はパイプトップで、底が抜けている洗面器はムクトップに例えることができる。

盛期におけるムクトップ使用と同様、こういった一手も、ヘラウキに使われている素材の特性を理解すれば、応用できるのではないだろうか。





## まとめ

ヘラブナの状態により、①上層からエサを追わせないとアタリにつながらないのか。②しっかりなじませて、タナをつくったほうが、良型がそろうのか。という見極めにより、ウキを選択すべきだと考えている。

チョウチン両だんご用のウキといえば、ムクトップとは単純に決め付けしないで、その日の状況に応じて使い分けていただきたい。

イメージとしては、

- ムクトップは早いアタリ
  - パイプトップはなじみ切ってすぐのアタリ、もしくは深なじみしてからのアタリ
  - PC ムクはトップ径を変えることにより、双方が可能
- また、足の素材の違いでも、同じオモリ負荷量で比較した場合、
- 竹はその素材の比重の軽さから、サワリが出しやすい
  - カーボンはその比重が重いことから、なじみ込みやすい

ウキは素材の組み合わせ、形状といったトータルセッティングである。各パーツばかりに目を向けるのではなく、あくまで全体構成で考える必要がある。